

(科目区分) 教科及び教科の指導法に関する科目 (中学校)
(授業科目名) 彫刻基礎演習

原初的な木彫制作と彫刻の基礎考察

美術教育講座 佐々木昌夫

1. 授業の概要

本授業は、中等教育コース美術教育専攻1回生を主な対象とした必修科目であり、彫刻分野における基礎的な学習を実技中心に行った。本年度の登録学生は、中等教育コース美術教育専攻1回生3名、小学校サブコース4回生1名の合計4名であった。

・授業目的

彫刻の素材・技法・対象などについての、基本的な考え方や見方を理解する。特に原初的な技法としてのカーヴィングの実践をとおして、彫刻制作の基礎的な方法を身につける。

・到達目標

- ①彫刻における量感・動勢・形・空間について考察して、自身の彫刻についての考えを構築する。
- ②カーヴィングの実践をとおして、基礎的な技術を習得するとともに、新しい形を探求する。

・関連するディプロマ・ポリシー

教育と教職に関する確かな知識と、得意とする分野・教科等についての専門的知識を修得している。(知識・理解)

教育活動に取り組むための十分な技能を身につけている。(技能)

・授業方法、形態、内容の概要

第1回目の授業で、トラック諸島・マイクロネシアに伝わる木製民具(国立民族学博物館所蔵)の例を提示して、彫刻における触覚性の重要性と原初性について説明した。次に、長さ1mで各辺が約3cm×3cmの木材(角材)を素材として与えた。その角材から、主に両刃ナイフを使用して、具象抽象を問わず連続した多様な形をカーヴィングで制作させた。一般的なカーヴィングでは、最初にスケッチやマケットを制作し、素材に繰り返し下書きを描きながら、計画的に制作を進めるものである。だが今回は、スケッチやマケットは制作させず、可能なかぎり下書き無しで、いきなり角材の一方の端から削り始めさせた。それは本制作

が、ヨーロッパで確立されたスタンダードな彫刻の方法によるのではなく、彫刻の原初的な地平に立つ試みだからである。その地点において、原初的な要素である触覚性を体現させながら、彫刻についての根源的な考察を、本授業では行った。また、合評会を2回行い、お互いの作品を鑑賞させて、意見交換と討議を重ねた。最後2回の授業で、彫刻のスタンダードな基礎訓練である模刻を実践させた後、授業全体をふりかえった。

2. アンケート結果

最後の授業で、以下のような選択方式と自由記述方式のアンケートを実施した。本年度は、受講生4名から回答を得られた。(自由記述の回答は、簡略化して掲載した。)

【授業の難易度】

[簡単]1名 [やや簡単]0名
[ちょうどよい]3名 [少し難しい]0名
[難しい]0名

【授業のスピード】

[遅い]0名 [やや遅い]0名
[ちょうどよい]4名 [少し速い]0名
[速い]0名

【授業への関心】

[全く関心がない]0名 [あまり関心がない]0名
[何とも言えない]0名 [関心がある]3名
[大変関心がある]1名

【授業への満足度】

[不満]0名 [少し不満]0名 [普通]0名
[満足]4名 [大変満足]0名

【この授業で学んだと思うこと】

- ・彫刻の基礎になる考え方や制作
- ・手の感触を大切に形をつくる楽しさ
- ・道具の使い方
- ・触覚性に着目した制作
- ・制作の安全性

【改善してほしい点、評価できる点】

- ・対面での授業を受けられたことが良かった。
- ・他の受講生の作品を見ながら、制作ができ

たこと。

- ・静かな環境で制作ができたこと。
- ・制作時間が長く、集中できたこと。
- ・課題 1（木彫）に比べて、課題 2（模刻）の制作時間が短かったこと。

【その他】

- ・今まで興味がなかった彫刻に興味を湧いた。

3. 総括

本授業の制作では、ヤスリがけ作業やウッドオイルの塗装作業を実施するため、実習室の環境整備に努めるよう心がけていた。しかしながら、まだ不十分であると推測されるため、来年度以降、さらなる環境整備の充実をめざす。一方、授業計画の段階では、一つの作品に長時間をかけて制作することへの不満を危惧していた。ところが、アンケート結果を見るかぎり、受講生は、一つの作品にじっくり時間をかけて取り組むことに、意義を見出していたと思われる。

授業目的・到達目標については、概ね達成できたと考えられる。だが、到達目標①の自身の考えの構築については、本来、完成ということはあり得ないので、これからも常に多角的に検討して深化するべきであろう。本授業は基礎的な授業という性質があることから、関連する DP の知識・理解、技能は、その基礎の部分においてのみ、ほぼ達成することができたと考えられる。しかし、学校現場や地域社会への活用は、まだスタート地点に立ったばかりであると言えよう。

授業時間外学習については、実行したほとんどの学生が作品制作をしていたが、危険を伴うという彫刻の性質から、常に道具・工具の安全指導の強化が必須である。また制作実践のみではなく、本来、彫刻はその表現と創造につながる、それぞれの主体性が重要である。そのためには、学生が能動的な好奇心を発揮することができ、その先に主体的な表現と創造の意欲があらわれる場としての、自由時間の確保が最も基本であろう。